# Alternative Systems Study Bulletin

第13巻第1号

（2005年4月28日）

**現場から**

社会協同組合のミッション

三団体の相互関係について

**ヘーゲル弁証法の転倒にスピノザは役立つか？**

**実体論の研究（第１回）**

**A ライプニッツの実体論**

**B ライプニッツのモナド論**

**マルクスと考える時間とお金の秘密**

**後書**

編集　境　毅

連絡先　〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱 169 号 貿易研究会

ホームページ　http://homepage1.nifty.com/office-ebara/

メール　kyw04500@nifty.ne.jp

会費　正会員　：　年間 1口　１０万円

賛助会員　：　年間 1口　３万円

購読会員　：　年間 1口　１万円

振込先　口座名　：　資本論研究会

（郵便振替）　口座番号　：　01090-5-67283

現場から

# 社会協同組合のミッション

2005年2月23日

## A） 三団体の活動を振り返って

### 1） ２００４年度の活動

私たち三団体（ＮＰＯ法人ニュースタート事務局関西、ＮＰＯ法人日本スローワーク協会、ＮＰＯ法人ワーカーズ・コレクティブ・サポートセンター）は、引きこもりという社会的に不利な立場の人たちをサポートする団体で、なおかつ働く人たちの協同組合（ワーカーズ・コレクティブ）で自らの事業を運営するだけでなく、協同組合的に働く場を新しく作り出そうとしています。このようなタイプの事業体を目指して３年目に入りました。

私たちの歩みは昨年１月に発行した『５周年記念誌』にまとめられています。その中に西嶋氏が書いた「ニュースタート事務局関西の近未来」という文章があります。そこには、４０名のスタッフが働く１億５千万円の事業体が構想されています。これが書かれたときには夢の部分が多かったのですが、昨年１年間の活動で、この夢が現実のものになりはじめています。

一昨年の年末から、専従者を置くことになり、事務所を探しはじめました。最初の計画ではカラオケ喫茶有希乃の２階を事務所とし、喫茶を働く場として営業しようとしました。そのうち岡本しろう高槻市議のご厚意で、現在の事務所が使えるようになり、そこを拠点にした活動が始まります。そのわりを食った形でカラオケ喫茶の方は開業はしたものの続けられず、夏には閉店しています。ここを手放した理由の一つに、地域通貨を使ったまちおこしへの１００万円の助成金が降りることになり、新たに富田でリサイクルショップを開くことにしたことがあります。カラオケ喫茶の代わりに地域に開いたショップを確保できたのです。そして地域通貨を使えるお店を少数でしたが開発できました。

他方、ニュースタートの事業の基幹である寮は、ＮＰＯ法人フェルマータと共同して、よすみにあるワンルームマンションを二番目の寮にすることができ、入寮者も１０名近くになり、寮の運営についても経験を蓄積することが出来てきています。また訪問活動も、事業高としては伸びてはいませんが、個別相談や例会や鍋会や父母懇談

会などと共に、ニュースタートの活動の基本で、ずっと継続してきました。

ここまでは従来の活動の継承と拡大でしたが、地域に開いたショップを営業する中で、手応えを感じたスタッフのなかで、カフェスローや教室事業（スロースペース）の起業についての検討が始まり、年末にはスローワーク研究会がもたれて、基本的なコンセプトをまとめていきました。その延長に、従来ニュースタート事務局関西からの委託事業が中心であったＮＳワーカーズの新しい独自事業として、これらの事業を位置づけることになり、法人格の取得を目指して、日本スローワーク協会を結成したのでした。

２）　２００５年の課題

今年は飛躍の年です。ニュースタートの従来の事業の拡大のほかに、新たにスロースペースとカフェスローの事業が始まります。

２月に富田駅近くのダイエー駐車場の前にあるマンションを借りて４名の寮生を受け入れられるドミトリーを開所し、以前のドミトリーは解約します。新しい寮は鍋会はもちろん、スロースペースの教室としても使え、しかも、寮の管理人の部屋もあります。これで寮は、よすみと二つになりましたが、また今年中に新しい寮が必要になると思われます。

スロースペースは、現在助成申請中で、助成があれば、財政的には楽になりますが、助成がなくとも進めていきます。最初は小人数かもしれませんが、きっと新たな活動として定着していくでしょう。現在お試し企画が始まり、正式発足は４月です。カフェスローは場所もほぼ決まり、事業計画と資金計画を煮詰める段階に入っています。

５月には日本スローワーク協会のＮＰＯ法人格が取得でき、種々の助成を受け易くなります。カフェスローも営業の段取りをつけていっているでしょう。

３）　活動の問題点

日本スローワーク協会を発足させたときの設立総会は、ワーカーズ・コレクティブ・サポートセンターの準備会を発足させた２００２年６月と比べて、参加者の若返りがありました。これ自体は歓迎すべき事ですが、しかし親御さんたちのサポートが少なかったので喜んでいられません。親御さんたちと若者が一体となって活動していかないと、今年を飛躍の年とすることは出来ません。昨年の活動での問題点はここにあると思います。この問題点を解決していくためには多くのことが必要ですが、私はここで私たちの活動のミッション（使命）について考えることで、問題解決の方向を明らかにしたいと思います。



Ｂ）　社会協同組合とそのミッション

1）　社会協同組合

社会協同組合という耳慣れないことばも、この間イタリア研修報告もあったりで、皆さんの了解事項になっていると思います。イタリアでは当事者をサポートするＡ型、当事者が働くＢ型を問わず、社会的に不利な立場の人たちに対しては公的な補助があり、その上で事業が成り立っていました。そしてこのタイプの協同組合が、社会協同組合と名づけられていたのです。

日本でも社会的に不利な立場の人々に対する公的補助はあり、またこの人たちをサポートしたり、当事者が働いていたりする団体はたくさんあります。しかしそこで働く人たちが協同組合を目指しているかといえば、そうではないようです。

ニュースタート事務局関西と関連団体は、引きこもりという社会的に不利な立場の人々をサポートするという、自分たちの関連事業を協同組合的に運営することを目指し、活動してきましたのでこの点が他の同種の団体や障害者をサポートする団体とは違っています。また、社会的に不利な立場の人たちと一緒に活動するという意味では、ワーカーズ・コレクティブの他の団体とも違っていたのです。そこで、サポートセンターを発足させるときに、全国的な連合体が、引きこもりサポートのほうや、障害者のほう、さらには、ワーカーズ・コレクティブの側にもたくさんあったのですが、どこにも所属しないという形をとりました。

今から考えれば、私たちはイタリアの社会協同組合のことは何も知らなかったにもかかわらず、同じような活動を始めていたのです。そして20年以上の活動経験を持ち、法制化されてからも15年近くたっているイタリアの社会協同組合の経験に学ぶことで、私たちの活動のミッションを作り上げていくことが出来るし、そうすることで、私たちの活動をより活発にしていけると思います。

2）私たちの到達点

社会協同組合の活動では、社会的に不利な立場の人たちが働くとき、労働時間は一般より短く、また給与も少なくなっています。イタリアでは労働者に適用される賃率があり、不利な立場の人たちも例外ではありません。おそらく一番下の職種で労働時間も半分ということになると、実際の収入は３分の１くらいになってしまうでしょう。この不足分を補填するのが公的補助でした。また不利な立場の人たちをサポートするためには、高齢者の介護に比べれば、人員の配置や労働の内容で、経費は高くなります。この不足分も公的な補助によっていました。

私たちの場合、引きこもりは確かに社会的に不利な立場の人たちに違いはありませんが、しかし現在のところ、公的補助はありません。また私たちの考えからすれば、公的補助を要求するということにはならないでしょう。このことを勘案してミッションをまとめる必要があります。

ニュースタートのもともとのミッションは家族を地域に開くということでした。これは、引きこもりは病気ではないという考え方に裏付けられています。これに、協同組合を目指し、もうひとつの働き方を実現すると言う課題が付け加わりました。やがてそれは地域でのまちづくりへとつながり、さらに、スローワークということばでトータルなイメージにまとめられています。これらを公的補助に期待することなく、自助努力で成し遂げること、これは協同組合という経営の形を選択することで始めて可能になると思います。

3) 私たちのミッション

現代社会の種々の問題点の集中的表現として、社会が次世代の形成に行き詰まり、引きこもりやニートやフリーターと呼ばれている若者たちを膨大に作り出しているという現実があります。戦争や不況や犯罪の増加といった大きい政治的･社会的･経済的な事柄には解決法を提起できないにしても、働き方や家族関係や地域の空洞化に対しては、解決する手段は意外と身近なところにあるのではないでしょうか。私たちが働き方を変えることから始めて、世の中が違ったように見えるという体験をし、そこから家族を地域に開き、地域でのまち作りにつなげていくことが出来れば、私たちはその手段を手にしているのです。

スローワークを合言葉に、働き方を変えましょう。

地域でまち作りを進めて、お金だけではない関係をつむいでいきましょう。

家族を地域に開き、孤立した核家族の限界を超え、家族と地域に、新しく、次世代育成力を形成していきましょう。

問題解決の主体は個人だけでは担いきれません。協同組合のシステムを利用し、個々人がユニークな存在でありながらも協同で事業を行い、パワーのある主体を育てていきましょう。



## 三団体の相互関係について

2005年3月16日

1) はじめに

今年を飛躍の年にしていくためには、新規事業が立ち上がっていく中で、三団体の相互関係を都度確認しながら進んでいくことが必要かと思います。それでこれまでの関係を整理し、当面のあるべき関係を描いてみます。これは非常に短期的なもので、スローカフェが立ち上がるときには再検討すべきだと思います。

2) 従来の相互関係

ＮＰＯ法人ニュースタート事務局関西の活動がまずありました。これをサポートする人たちの集まりが種々ありましたが、働く場を協同組合で、ということを決めた2002年１月からは、今日に見られる形になっています。

まずニュースタート事務局関西の活動によって、サポートを求める人たちを開拓し、具体的に事業の形にします。これを業務委託の形にまとめ、ＮＳワーカーズが受託します。そして、協同組合作りをサポートするサポートセンターは、メンバーに対して育成活動や、メンバー以外の人たちへの社会教育活動に取り組みます。2002年から2004年末までは大体こんな感じだったように思います。

3) 変化の兆し

2004年末に従来の相互関係に変化が見られるようになります。変化の要因は、地域通貨の助成を受けることで、地域でのコミュニティビジネスを開始したことに求められます。つまり、ニュースタートからの業務委託事業以外の新規事業が立ち上がったのです。この新しい事業に参加した人たちの中から、スロースペースやスローカフェの事業企画案が立案され、これらの企画のバックボーンとなる「スローワーク」という考え方についての研究会がもたれました。そして、その帰結として、ＮＳワーカーズの法人格についてはＮＰＯ法人とし、名称も日本スローワーク協会とし、新規事業の事業主体とすることにしたのです。

4) 当面のあるべき関係

まず三団体の共通のミッションを決めましょう。たたき台は次のものです。

（ミッション）

① スローワークを合言葉に、働き方を変えていきましょう。
② 地域でまちづくりを進めて、お金だけではない関係をつむいでいきましょう。
③ 家族を地域に開き、核家族の孤立を防ぎ、家族と地域に、新しく、次世代育成力を形成していきましょう。

次に現在の人員配置を保障する財政基盤を確立し、有給職員を増やしていきましょう。

5) 具体案

三団体運営会議は、私としてはそれぞれの団体の組織運営について確立していくことを目標にしていました。現在この目的は達成されたと判断しています。今問題になっているのは、三団体の事業についての責任ある体制をつくることです。

この間の運営会議では、実際上事業に専従的に関わっている人たちの集まりとなっています。それでこの会議を専従者会議としても位置づけて、三団体の事業に責任を負えるものにしたいと思います。

運営会議の新しい形（略）

## 第３回公開講座のご案内

**ネットワーク・情況関西　代表　表三郎**

昨年 9 月より始めました表三郎主催のスピノザ研究会をリニューアルし、ネットワーク・情況関西として、再出発することになりました。スピノザ研究をメインにすえた定例研究会のほかに、隔月で公開講座を開くことにしたのです。その講座の第 1 回は、現代ロシア史の専門家である藤本和貴夫さんに来ていただき、面白いお話を聞かせていただきました。東京からは情況編集部の大下さん、名古屋からは河合塾の牧野さん、大阪からはニュースタート関西の西嶋さんがお見えになりました。そのほか懐かしいお顔も見られました。

第 2 回目はアドルノやベンヤミンを研究されている高橋順一さんに来ていただき「アウシュヴィッツ 60 年の記憶」というテーマで熱っぽい報告をしていただきました。参加者は若者中心でした。

日本では立ち上げるときが一番大きくて時間がたてばしぼんでいってしまう、というパターン



の運動が多いですが、私たちは立ち上げのときは少数でもだんだん大きくなっていくような運動を考えています。若者たちには論文執筆のチャンスを提供し、年配の方には社会運動へのお誘いが出来るようなネットワークを育てていきたいと考えています。

第 3 回目は下記の通り関西在住の赤堀さんに講演をお願いしました。デリバティブという金融取引には確率論などの数学が必要で、数年前には日本人で理解している証券マンは皆無といわれていました。赤堀さんはこれをマスターし、証券マンの教育を引き受けておられます。その報告を解りやすくするため今日の信用について境が解説します。お誘いあわせてお越しください。なお会場で、雑誌『情況』を割引価格で販売します。

記

日時　2005 年 5 月 22 日(日) 午後 1 時から 5 時
場所　京大会館 (℡ 075-751-8311)
テーマ　資本主義の姿－確率論から見た世界
講師　赤堀次郎(立命館大学助教授、専攻、数学)
演題　デリバティブの数理
解題　今日の信用現象と信用制度について　境　毅
　コメンティター　表　三郎
主催　ネットワーク・情況関西　代表者　表三郎　事務局長　境毅
後援　情況編集部　大下敦史
　NPO 法人ワーカーズ・コレクティブ・サポートセンター　代表者　境毅

以上

## 第６回市民文化講座のご案内

NPO法人ワーカーズ・コレクティブ・サポートセンター

昨年 7 月から三回にわたって、宝塚市のまちづくりのケーススタディを行ってきました。7 月には松本誠さん（明石市民まちづくり研究所）、9 月には宝塚市中山台にお住まいの坂野はるみさん、11 月には田中義岳さん（現宝塚市社会教育部長）に来ていただき、まちづくりの総論、

住民サイドの取り組み、行政サイドの取り組みについて報告を受けました。

さて、これからはテーマをコミュニティビジネスとし、何回かの講座を企画いたします。1 月には地域通貨 Q の宮地剛さんをお招きし地域通貨についてお話していただきました。3 月には NPO 法人寝屋川あいの会の安東まさこさんに来ていただき、地域での活動の具体的な報告をしていただきました。そして今回は地元でカフェを準備しようとしている NPO 法人日本スローワーク協会に協力していただいている大岩剛一さんに、カフェとコミュニティビジネスのイメージについてお話していただきます。奮ってご参加ください。

## 第 6 回市民文化講座実施要綱

日時　2005 年 5 月 28 日(土) 午後 2 時から午後 6 時まで(第 2 部は午後 4 時から)
場所　ニュースタート関西との共同事務所(高槻市富田 1 丁目、プラザ富田 205 号)
連絡　担当者 境 毅 080-3139-7820
参加費 一般 1000 円 (地域通貨での支払いも可)
(参加費については相談に応じます)

カリキュラム

第1部　障害者福祉について(午後 2 時より)
報告者 境 毅さん (当法人理事長)

90 年代の日本の社会福祉政策とその運営についての変化については前回報告しました。今回は、障害者福祉について調査し報告します。

第2部　カフェスローとコミュニティビジネス(午後 4 時より)
報告者 大岩剛一さん(成安造形大学教授、建築家)
コメンテイター 岡本しろうさん(高槻市市議)

東京でカフェスローを開くときに建築家の立場から関わられた大岩さんが、富田で準備しているカフェにも関わってくださっています。カフェは7月オープンを目指して作業が進められていますが、カフェ準備のプレイベントという意味も込めて、大岩さんに建築家の眼からのコミュニティビジネス論を語っていただきます。



## ヘーゲル弁証法の転倒にスピノザは役立つか？

スピノザ研究会 3 月例会報告
2005 年 3 月 27 日　のレジュメを増補

はじめに

2 月例会での表さんの報告 (ヘーゲル哲学史のスピノザの項の読み合わせ) を聞いていて突然思い当たり、その場で意見を述べました。スピノザはヘーゲル弁証法の転倒に役に立つ、というのがその趣旨でした。忘れてしまわないうちに要旨をメモしておきます。

1) ヘーゲル弁証法の転倒とは

「ヘーゲル弁証法の転倒」とは、マルクスが『資本論』の第 2 版あとがきで述べていることで、そのこともあって、レーニンも『哲学ノート』で努力をしているし、見田石介といったマルクス主義に立つ哲学者や新左翼の廣松渉など、転倒について試みた人は多くいます。しかし私の見立てでは、まだ上手く転倒できた人はいないように思います。それで私も努力してきたのですが、やっとのことで転倒の方法を明らかに出来ました。『ＡＳＳＢ』誌に数編のヘーゲル論を載せ、ＨＰにもＵＰしてありますが、その要点を述べてみましょう。

ヘーゲルの弁証法のからくりは、対象と自我という両極を、意識という第三者を媒介物として立てて、そしてこの意識のうちに両極を取り込み、意識を主体とし、対象と自我とを意識の契機とすることで、意識の弁証法を成立させている、というものであることが分かりました。そうだとすると、転倒とは、意識の外にある、対象と自我という両極を主体とし、意識を両極が反照しあう場として設定することで可能となります。私はこの転倒した弁証法に「外の主体の弁証法」と名づけ、そして、ヘーゲル研究者たちにとっては皮肉なことに、ヘーゲルの『精神現象学』は、後の『大論理学』で確立される意識の弁証法ではなく、この外の主体の弁証法が駆使されていることを明らかにしてきました。とは言うものの、外の主体の弁証法はどのようにして展開できるのかという問題にはまだ手が出ませんでした。ところがヘーゲル『哲学史』のスピノザ批判のところを反面解釈すれば、この問題に接近できるように思われたのです。

2) ヘーゲルのスピノザ批判 (1)

「スピノザの観念論を単純にいいあらわすと、真なるものは端的に一つの実体であ

り、この実体は思考と延長を属性とする。それらの絶対的統一体が現実であり、それが神にほかならない、と定式化できます。‥‥このように両極をなす自立した存在が、スピノザにあっては破棄され、一なる絶対存在の要素となります。――ここで注意してほしいのは、存在を対立物の統一としてとらえねばならないことです。大切なのは、対立を放棄したり、片隅に追いやることではなく、対立を媒介し解決することです。ここでは、有限と無限、限界と無制限とが抽象的に対立しているのではなく、思考と延長が実質的に対立しています。」（長谷川宏訳『哲学史』下、作品社、243 頁）

ここでヘーゲルは、スピノザが思考と存在の統一を実体つまりは神と捉えて、思考と存在とが神の属性として、一なるものの要素とされていることに異議を申し立てています。ヘーゲルの意識の弁証法からすれば、存在を対立物の統一として捉えるべきであり、神を思考と延長との対立物と捉えて、この対立を媒介して解決することが必要なのです。

ヘーゲルの体系で存在を対立物の統一と見る見方は、自我と対象を第三者としてある意識で統一するという考え方に基づくものです。一なるものは実体であり、神である点ではスピノザと共通ですが、ヘーゲルはそれを精神と捉え、意識の働きとして、これを主体的なものとして捉えました。

これに対してスピノザは、思考の限界を考えたのですね。対象と身体と心という関係はスピノザにあっては、身体が対象と関係するときに、心にのぼらないものがあるとされました。これはアドルノが否定弁証法で述べている、思考に組み込まれない「のこりもの」を髣髴させます。

ヘーゲルにあっては、自我と対象を意識で統一し、意識の運動による対立の解決を図って、論理学を鼎立していきます。この場合の弁証法は思考の運動しか存在し得なくなります。これに対してスピノザでは身体と対象（延長）とが、心のうちで反照し合うものと捉えているようです。心は反照の場で主体は実体である対象と身体です。反照は関係の論理で文化知を要求します。スピノザに文化知の萌芽があるかどうかを調べることは今後の課題ですが、スピノザが身体と対象の運動を捉えようと努力したことは明らかです。

3）ヘーゲルのスピノザ批判（2）

「主観性や個体や個人の原理がスピノザ哲学のうちにみられない」（245 頁）

「絶対的な実体は真なるものです。が、それは、真理の全体をおおうものではない。それは、内部に活動と生命をもつような精神としても定義されねばなりません。‥‥彼の哲学は、硬直した実体の立場にとどまるもので、いまだ人間にしたしい精神にはなっていない。」（247 頁）



「区別が外部に存在し、あくまで外的なものにとどまって、区別を律する概念は求めようがないのです。」（248 頁）

このヘーゲルの批判は、逆にスピノザの可能性を開示してはいないでしょうか？「区別」は意識（=主体＝精神=神‥‥ヘーゲル）の外部に存在し、「区別」（=対象と自我）を律する概念は求めようがない、というヘーゲルの批判を裏返せば、「区別」（=対象と自我）の方こそが主体（スピノザの実体=神）であって、ヘーゲルが信奉している「精神」という心の働きは、「区別」が反照しあう場であるにすぎないものとなります。ここから、外の主体の弁証法が展開可能になるように思います。

スピノザの論理は、心が実体を捉えるとき、「のこりもの」を取りこぼすので、理性はヘーゲルのように十全なものではありえず、かくして理性批判が展開されていきます。だから、精神現象（心の働き）はヘーゲルのように論理学にはならず、倫理学とならざるを得ないのです。

4）ヘーゲルのスピノザ批判（3）

「実体、属性、様相という三つの契機を、スピノザは概念として打ち立てるにとどまらず、演繹してみせる必要があったのです。実体、属性、様相の定義は特に重要で、それらはそれぞれ、普遍、特殊、個別と呼ばれるものに対応します。」（251 頁）　個別を様相としてしか捉えないのは、「個別的な主観は、安定した普遍的存在」（251 頁）であることをみないことになる。

ヘーゲルはこのように個の自立を主張していますが、スピノザは、個人の自由や自立は、心が実体の「のこりもの」を掬い取らない限りにおいて描き出す幻想だと考えました。この考え方は、意識形態への批判としての意義を持つのではないでしょうか。

## 実体論の研究（第１回）

### A　ライプニッツの実体論

はじめに

廣松渉の物象化論について再検討する必要があり、すでに「廣松哲学への疑問」としてまとめた論考のうえにたって、「実体に対する関係の一次性を主張する存在論」（廣松『ヘーゲルそしてマルクス』264 頁）と自称されている関係主義が、単に「物象化的

錯視」を暴くことでことたれりとされ、一向に、関係そのものの解明が進まないことがずっと気になっていたのでしたが、最近その原因が、廣松の「実体主義」の把握の誤りにあることに気づきました。

廣松の「実体主義」とは、近代的科学知が前提とする主客の二項対立の上に、実体をアトムのごとき個物とみなす考えなのですが、哲学史を振り返れば、このような実体把握はごく少数派です。このような廣松の「実体主義」についての軽薄な把握が、関係の解明を不可能にしているように思ったのです。実体とは関係の極として現象し、それ自身が関係態の要素としてあるという文化知の発想を豊かにすべく、ライプニッツとアリストテレスの実体論を研究してみます。

今スピノザ研究会でスピノザを研究しているので、ライプニッツについてもまずスピノザとの絡みで見ていきましょう。

「1676年11月（パリから）故国ドイツへの帰途、ライプニッツはスピノザと会談する。そして1677年2月スピノザ死去の後、1678年2月には『エチカ』を入手し、その内容に詳しく触れたと推定される。」（酒井潔『世界と自我』、創文社、154頁）と言われています。そして、1685年頃から書き始められたと推定されるライプニッツの『形而上学叙説』（岩波文庫）を読めば、スピノザの『エチカ』が念頭に置かれて、神と実体についての叙述がなされていることは明らかです。スピノザの理解のためにもライプニッツを取り上げることが必要でしょう。

1） 神と実体についてのスピノザとライプニッツの差異

スピノザの神には私は全然なじめませんでした。トマス・アクィナスが『神学大全』で、「人間の認識能力を超えることがらを、人間が理性によって詮索するのはたしかにまちがっている。しかし神によって啓示されたならば、信仰をもってこれを受け容れなければならない。」（『世界の名著』、続5巻、中央公論社、81頁）というように、合理的なものは理性で把握できるが、神のごとき超越者は理性では把握できず、信仰によるしかないと述べたことに対して、神を理性的・合理的なものとして捉えようとしているということは解るのですが、その実体論が神秘的で良くわからない。とりあえず、スピノザの『神・人間の幸福に関する短論文』（岩波文庫）から、神とは何かという設問への答えを引用しておきましょう。

「神とは、我々の見解に依れば、一切が帰せられる実有、換言すれば、各々が自己の類に於いて無限に完全であるところの無限数の属性が帰せられる実有である。

これに関する我々の見解を明瞭に表明する為に、我々は次の四つの命題を前提するであろう。



一、 限定された実体は存在せず、全ての実体は自己の類に於いて無限に完全でなければならぬ。即ち、神の無限な知性の中に於いて、如何なる実体も、それが既に自然の中に存するより一層完全であることが出来ない。

二、 二つの等しい実体は存しない。

三、 一つの実体は他の実体を産出することが出来ない。

四、 神の無限な知性の中には自然の中に形相的に存するよりほかの如何なる実体も存しない。」（スピノザ前掲書、62-63頁）

このようなスピノザの定義からすれば、人間の身体は有限であるから当然のこととして、その精神も実体とはみなされず、精神は神の属性の様態とされるのでした。

これに対してライプニッツはモナド＝個体的実体を人間の精神性に求めました。スピノザにあっては、実体は結局、神=自然ということで一者に帰せられるか、逆に、汎神論的に、多とみなされるかですが、ライプニッツの実体論にあっては、一＝多という構造として、一者が多様なものの相互関係として把握されているのです。このような実体論はライプニッツの次のような神についての理解を生みました。

「すべて実体は一つのまとまった世界のようなものであり、神の鏡もしくは全宇宙の鏡のようなものである。実体は全宇宙を各自分流儀に従って表出する。云って見れば先ず、同一の都市が之を眺める人の様々な位置に従って色々に表現されるようなものである。・・・・・又すべての実体は神の無限な智慧と全能との性質をいくらか帯び、力の及ぶ限り神を模倣するといふことさえできる。」（ライプニッツ前掲書、85頁）

ライプニッツにあっては、個別的実体は、神とは別の存在であり、その存在様式は、神の鏡となるようなひとつの関係の極なのです。このような神と実体についての結論的見解にいたる経過を次にたどってみましょう。

2） ライプニッツの神学批判

ライプニッツは『形而上学叙説』で神について論じていますが、その冒頭は神学批判となっています。まず「神は絶対的に完全な存在である」ということばを手がかりに、完全なものということについての考察から、「能力や知識は完全なものであり、それが神に属する限り限界を持たない。」（69頁）と述べています。

次に「事物は善の法則によって善いのではなく、全く神の意志だけによって善いのである」という見解に対しては、完全なものは、能力や知識ですから、これは意志ではなく従って、ライプニッツは「真理や法則は神の悟性から出て来るもので、神の悟性は確に神の本質と同様神の意志には依存しない」（71頁）といって反駁しています。

神学的な考え方についてのその他のいくつかの反論をした後、ライプニッツは落と

しどころについて次のように述べています。

「あらゆるものの中で『最も完全な、然も一番嵩張らない、即ち互いに一番邪魔にならないもの』は、『精神』であって、その完成が徳性である。それであるから『精神』の幸福が神の主要な目的であり、神は普遍的調和の許す限り『精神』の幸福を持ち来すのであるということを疑ってはならない。」(77 頁)

神の精神、そこに含まれる悟性、これを神の完全性と捉えたライプニッツは「神がこの世界をどんなに造ったとしても、世界は常に規則的であって、一定の普遍的秩序に従っている」(79 頁) と述べることで、意志ではなく悟性による世界の把握に道を開きます。このようなライプニッツの考えは、神のうちに合理的なものの優位をよみとり、悟性でもって自然を解明していくことの根拠を与えたものといってもよいでしょう。つまり、信仰よりも悟性に優位を与えたのです。そしてこの悟性の担い手が個別的実体としてある人間なのです。引き続いて実体論を見てみましょう。

3) 個別的実体論の展開

ライプニッツは個別的実体の概念を与えるに際して、次のように述べることから始めています。

「神の作用を神が造ったものの作用と区別することは中々むつかしい。神が凡てを行うと信ずる人もあり、神はただ神の造った物に与えた力を保存するだけだと考える人もある。この二説のいずれがどの程度まで云われるかを次に見ようと思う。さて『作用を及ぼすことと受けることとは元来、個別的実体に属する』(作用は実体に属する) とする以上、こういう実体とは何であるかを説明する必要がある。」(81—82 頁)

訳者の河野與一によれば、「個体的実体」(substance individuelle) という用語は、第 10 章の「実体形相」(forme substantielle) と同じものをさし、1696 年以降「単子」(monade) の名で置き換えられたということです。ライプニッツはこのように述べた後いろいろスコラ哲学の諸説に関連して議論を展開していますが、それをずっと追うことはせず、先に引用しておいた「神の鏡もしくは全宇宙の鏡」という規定を述べた後の、興味を引く論点を拾っておきましょう。

「私が上に説明した実体の本性について深く考える人には、物体は形而上学的厳密を以ていうと実体ではない (これは実際プラトン派の人の意見であった) ということかもしくは、物体の本性全体がただに広がり即ち大きさ、形及び運動からばかり成り立つものではなく、精神と関係ある何物かをそこに必然的に認めなければならないということがわかるであろう。この何物かは、仮に動物の精神というものがあるとすればその精神と同様に、現象に少しも変化を及ぼすものではないけれども、一般に実体



形相と称しているものなのである。」(90 頁)

「大きさ、形及び運動の概念は、人が考える程判明なものではない。色とか熱とかいうような、我々の外にある事物の本性の中に本当に存在しているかどうか疑わしい諸種の性質と同様に何処か形象思惟的な、我々の表象に関係のある点を含んでいる。」(90 頁)

ここでライプニッツが「精神」といっているのは、今日理解されている個々人の心の働きのことではなく、おそらくは個物相互の関係としてある超感性的な働きのことでしょう。そしてそれは実体の作用として考えられているのです。だから人間の心の働きと精神とを区別してライプニッツは次のように述べているのです。

「然し他の物体の精神即ちその実体形相は『悟性を具えた精神』とは甚だしく異なっている。『悟性を具えた精神』のみが自己の作用を知り、ただに自然的には死滅しないばかりでなく、自己が如何なるものであるかという知識の根拠を常に失わずにいるのである。」(91 頁)

このくだりは面白い。石や犬にも精神作用が働いているが、この作用を知ることが出来るのは悟性を具えた精神を持つ人間だけだ、というのです。ひき続いて観念についての考察を見てみましょう。

4) 精神と観念

「観念とは何であるかをはっきり考えるには、多義の曖昧を防がなければならない。多くの人は観念を我々の思想の形相又は差異と考えている。そう考えれば我々は、観念のことを考えている間だけしか、その観念を『精神』の中に持っていないことになる。我々が再びその観念のことを思う毎に、同一の物について、前の観念とは無論似ているが、然も違った観念を持つことになる。然し又観念を思想の直接的対象、即ち我々がそれを直観していない時も存続する、何か永続不変的な形相と考えている人もいるようである。そう思えば成程我々の精神は常に、どんなものでもそれを考える機会が来さえすれば、何か或る本性又は形相を表象するという性質を持っている。私は、我々の精神が持っている『この何か或る本性、形相又は本質を表出するという性質』が、本当の意味でいう『物の観念』であって、それは我々の中にあり、我々がそれを考えても考えなくても常に我々の中にあるものだと信じている。我々の精神は神及び宇宙を表出し、あらゆる本質並びにあらゆる実在を表出しているからである。

このことは私の立てた諸原理と一致する。何故かといえば、自然的には何物も外から我々の『精神』の中に入って来ないからである。恰も、我々の精神が外から来る使者のような形象を迎え入れるとか、我々の精神に戸口や窓があるとかいうように考え

るのは、我々が持っている悪い習慣である。我々は『精神』の中に、これらの形相をことごとく持っている。然も常に持っている。何故かと言えば、『精神』は常にその未来の思想をことごとく表出していて、今後判明に考える筈の凡てのものを、混雑にではあるが、既に考えているからである。そこで『我々が、＜精神＞の中に既にその観念を持っていて、それが質料となってその思想が出来上がるようなもの』でなければ、我々には知ることができない。」(129—130 頁)

このようにライプニッツは、観念を、頭のなかで形成され、確かめられたものとしての思想として捉えるだけでなく、人間がそれを直観していない時にも存続するものと捉えている。ライプニッツによれば、観念とは人間が考えても考えなくとも、人間の中にあるもので、精神の中に既にあるものとされています。

「さて形而上学的真理の厳密な意味からすると、神だけを除けば我々に作用する外的原因は無い。神だけは、『我々が絶えずそれに依存しているということ』によって直接に我々に交渉を持つのである。その結果、我々の精神に触れて、直接我々の表象を惹き起こすような外的対象はないということになる。そこで、我々が我々の精神の中にあらゆる物の観念を持っているのは、全く神が我々に及ぼす不断な作用のために他ならない。即ち、それは凡ての結果がその原因を表出するからであり、そういふ風にして我々の精神の本質が、神の本質、思想、意志及びそこに含まれているあらゆる観念の或る表出、模倣もしくは形相になっているからである。だから神だけが我々の外にある我々の直接的対象であって、我々は神によって凡ての物を見るということができる。」(134 頁)

ライプニッツは精神の中に観念がある理由を、神との関係に求めています。というのも、神は、人間に作用する外的要因であり、神が精神に不断に作用を及ぼすことで、精神が、神を映す鏡として、神の本質、思想、意志などの観念の表出になっているというのです。

「とはいえ私は、我々の観念そのものも神の中に有って、決して我々の中には無いと主張するように見えるあのえらい哲学者達の意見を採るものではない。これは私の考える所ではどうも、実体について我々が今考えたことも、我々の精神の範囲及び独立性、即ち我々の精神がそれに起る凡てのことを含んでいて、結果が原因を表出するように、我々の精神は神を表出すると共に可能的並びに現実的な凡てのものを表出するということも、あの人たちはまだ十分に考えなかったところから来ていると思う。」(135—136 頁)

「とにかく、我々が今述べた思想、特に神のはたらきが完全であるという大原理と、実体の概念がその凡ての出来事と共にそれの起る際の凡ての事情を含むという大原理



は、宗教を確立し、極めて大きい困難を解決し、精神を神の愛で燃やして、今まで人が見た仮説よりも遥かに『精神』を高めて非物質的実体を認識させる役にこそ立て、決してそれを妨げるものではないと思われる。」(146 頁)

ここでライプニッツは、観念は神の中にあって人間の中にはない、という考え方を批判しています。

5) 実体の自発性

ライプニッツは、実体としてある人間に自発性を認めます。

「それで、凡て実体は完全な自発性を持っていて（悟性を具えた実体に於いてはそれが自由となっているが)、実体に起こることは凡てその観念もしくは存在から出る結果であり、神だけを除けば何一つ実体を決定するものはないということがわかる。」(147 頁)

「精神は自分だけでその世界全体をつくっていて神だけといれば足りるのであるから、精神はあらゆる外部の物に対して絶対的に安全な地位に置かれている。そこで絶滅によらずに精神が死滅するということも世界（精神をそれの活きた恒久的な表出としている世界）がひとりでに破壊するといふことも不可能であるし、又我々の身体と呼ばれているこの広がりをもった魂の変化が精神に何か作用を及ぼすとか、この身体の消滅が不可分のもの（精神）を破壊するとかいうことも不可能である。」(147 頁)

「精神は、ある仕方を以って或る時の間、他の物体が自分の身体に対する関係に従って宇宙の状態を表出するからである。・・・・・宇宙のあらゆる物体が同感しあっているので、我々の身体も他の凡ての物体の印象を受けるが、我々の感覚は凡てのものに応するけれども、我々の精神が凡てのものを個々別々に注意することは可能でないからである。」(149—150 頁)

ライプニッツの精神は、作用であり、肉体を持った個々の人間を超えた存在です。

「実際、理性的精神は最も完成し得るべき実体であって、その完成の特徴となる点はそれが互いに妨げ合うことが最も少ないといふこと、寧ろ互いに助け合うといふことである。・・・・・理性的精神だけは神の姿に像って造られ、恰も神の一門の出もしくは神の家の子のようなものである。それで理性的精神だけは自由に神に仕え、意識を以て神の本性を摸倣しながら行動するのである。理性的精神は全世界を表出するばかりでなく、世界を認識し、世界に於いては神に倣って自分を支配しているから、唯一つの理性的精神も世界全体だけの価値がある。そこで、成る程どの実体も全宇宙を表出してはいるけれども、それでも理性的精神以外の実体は神よりも寧ろ世界を表出し、理性的精神は世界よりも寧ろ神を表出しているようである。」(157—157 頁)

この考え方は、人と人との関係において、神（類としての人間）がどのようにして生成されるか、ということを示唆しているように思われます。これは関係を解明する文化知の萌芽としての意義を持っているのではないでしょうか。

さて今日ライプニッツは最新の数学や物理学を予想したものと受け止められて、いろいろな読みがなされていますが、次に『単子論』を関係を解明する文化知の観点から読んでみましょう。

## B　ライプニッツのモナド論

### 1）極の思想家

ライプニッツのモナド論とは単純な個物としてのアトムではなく、関係として捉えられた「事物」の極を指している。いま、ライプニッツを極の思想家として位置付けて、この見地から、モナド論を組み替えてみよう。引用の数字はモナド論の項で、訳文は池田善昭『モナドロジーを読む』（世界思想社）による。

ある関係を想定したとき、その関係における極の極性とは「複合されたものの中に入っている単純なる実体（モナド）」（1‥‥モナド論の項目）で「部分を含まない」（1）。単純な実体が「集合」（2）すると複合体となり、宇宙や自然界や人間社会となるが、極としての単純な実体は関係としてある「事物の要素」（3）である。

（注記）　関係の両極とは、それがたとえば人間といった自然物から構成されていようと、極性それ自体は、社会的な質を持ち、自然物とは別の質を持つものとして存在しているがその質は超感性的なものであり、いわゆる社会的実体（マルクス価値形態論）となっているから、ライプニッツの言うように「部分を含まない」が、関係という「事物の要素」であることになる。

### 2）極の原理

極には個物と違って「解体という概念はない」（4）し、「自然に消滅してしまう」（4）こともなく、またそれは「自然に生成するような何らかの手段もありえない」（5）。極は「生成するにも終焉するにも一挙にするほかはない」（6）。つまり、単純な実体としてのモナドを含んだ個物が、解体あるいは死滅しても極性は残り、極をなす関係の「絶滅によってのみ死滅するしかない」（6）のである。

関係のうちで成立している極は、他の極から「変化を受け」（7）ることなく、「モナドには、何か事象が出入りできるような窓などは存在しない」（7）けれども、極は「なんらの性質をもっていなければならない」（8）。

（注記）　関係をつくっている個物は、自然的なもの（質料）と社会的なもの（基体）との二重物であり、極性は社会的なものの現象する場であるので、たとえば個々人は死んでも人類が解体するわけではない。そして、この意味では、極とは人類の化身とされた個人なのだ。

### 3）極としてある人間

この関係の極についての原理（モナド論）を人間存在に適用すればどうなるだろうか。個々の人間は、単純な実体としては社会関係の極としてのモナドであるが、「どのモナドも他のすべてのモナドと互いに相違している」（9）し、また「すべての創造された存在は変化を免れない」（10）ということになる。さらに「モナドの自然的変化は内部原理から生ずる」（11）とともに、「変化する内容の細部が必ず存在」（12）していて、「単純なる実体の個別化および多様化を与えている」（12）事が見られる。

（注記）　ここには個の唯一性についての理解がある。

つまり、個々の人間を関係の極としての単純な実体（モナド）と捉えれば、単一の存在でありながら、それぞれ互いに相違し合い、また内的原理によって変化していく動物である。その上に、社会関係の極としては、多様を含み、「一即単純なものの中に多を含」（13）み、「状態や関係の多様性が存在」（13）していることになる。

人間をデカルトのように自己意識と捉えるのではなく、極の担い手と捉えると、「単純なる実体の中の推移的状態」（14）を「表象」と捉えこれを「自覚的な表象あるいは普通の意識とは区別」（14）する道が開け、これを精神（esprits）と区別して「霊魂（ames）」（14）をモナドとして捉えることが出来る。

（注記）　デカルトは人間を自己意識として捉える際に世界と対面している孤立した個人から発想したが、ライプニッツはこれとは逆の関係の網の目に取り込まれた、極としての人間を捉える方法を提起している。またここで「表象」と訳されているのはモナド同士の関係の中でモナドが受け取る波動的な力のことだ。

そうすると、「一つの表象から他の表象への変化あるいは推移をなす内部原理の働きを名づけて、欲求ということができる。」（15）ことになり、「私たちの意識する思想がたとえどんなに微小でも、対象化されうる多様性を含んでいるものであるがゆえに、私たちは自分自身で単純なる実体の中に多を経験する。そういうわけで、霊魂を単純なる実体と認めるすべての人々は、誰しもモナドの中にこの多を認めないわけにはいかない。」（16）ことになる。

極としての人間には「表象と表象の変化だけが、単純なる実体の中に見いだされるのである。またそれだけが、単純なる実体の内的作用のすべてである。」（17）ことになり、モナドとしての人間は「エンテレケイア（根源的活動力）」（18）であり、「非物質的な自動装置」（18）なのだ。

（注記） 動物を自動機械という物質的なものへと還元するのとは対照的に、ライプニッツは物質的なもののうちに精神的な力を認めた。

4） 人間の自己意識

「もし、私たちが説明してきたような広い意味での表象と欲求をもっているようなすべてを霊魂と名づけるならば、単純なる実体、すなわち創造されたモナドのすべては、霊魂と呼ばれてしかるべきではある。しかし、感覚というのは単純なる表象以上の事柄であるから、表象しか含まない単純なる実体には、モナドとかエンテレケイヤという一般的な名前で十分であると私は考えた。そして、その中でも表象がいっそう判明で、しかも記憶を伴うものだけを霊魂と呼ぼうと思う。」(19)

「霊魂はやはり単なるモナド以上の事柄である」(20)

このようにライプニッツは、宇宙を物質相互が関係して生成される「事物」と見ており、そしてその要素たるモナドをエンテレケイヤと名づけて、そこに「非物質的な自動装置」を見出している。表象（波動）しか含まない単純な実体、感覚を持ち、記憶を伴う霊魂、これが物質によって構成されるモナドと動物のモナドとの差である。

「微小表象がどんなにたくさんあっても、そこに際立った表象がなければぼんやりしてしまう。」(21)

「しかし、必然かつ永遠の真理の認識こそが、私たちを単なる動物と区別すべきものであり、それで理性と知識を私たちは身につけることになる。私たちは、自己自身を知り、かつ神を知る認識へと高められる。それが私たちの中にある理性的霊魂、つまり精神と呼ばれるものである。」(29)

モナドは全て、宇宙と神とを映す鏡であり、この意味では霊魂であるが、しかし、理性的霊魂、つまり精神を持つものだけが自己を知り、神を知る。これがライプニッツが与える自己意識論だ。

「また、必然的真理の認識やそのさまざまな段階の抽象作用を通じて、私たちは反省行為にまで高められる。この反省行為が私たちに私と呼ばれるものについて省察させ、そして私たちの中にこれがあるとかあれがあるとか考慮することについて省察させる。このように、私たちは自分自身を省察しながら、同時に、存在、実体、単純なるもの、複合されたもの、非物質的なもの、神そのものについて省察するようになる。こうした反省行為こそが、私たちの思考の主要な対象を生み出すのである。」(30)

このような展開は、デカルトの「われ思うゆえにわれあり」というテーゼを、人と人との関係においては、極としての個々人が神の化身とされる、という事実のうちに包摂しているように思われる。



# マルクスと考える時間とお金の秘密

季報『唯物論研究』投稿

1） 時間とお金の秘密

『モモ』（岩波書店）や『はてしない物語』（岩波書店）で有名なエンデが、『エンデの遺言』（NHK 出版）で利子生み資本について考察していることをご存知ですか。わたしは、『モモ』と『オリーブの森で語りあう』（岩波書店）と『エンデの遺言』とを一つながりの物語と考えて、『モモと考える時間とお金の秘密』（書肆心水）という本を書きました。そこでは「時間がない」と言って時間に追われている現代人は、「時間どろぼう」である「灰色の男たち」と時間貯蓄の契約を結ぶことで貯めた時間を盗まれている、というエンデのファンタジーに託して、今日の産業資本の本性を、資本という物象が、特有の仕方で人格の意思を支配しているところにあると読み解いてみました。でもこの批評は、舞台裏を明かせばマルクスと考える時間とお金の秘密でした。ここではマルクスと一緒に同じ問題を考えてみます。

2） 労働と時間貯蓄

エンデの時間貯蓄銀行のアイデアをマルクスの理論の中に位置づけようと考えたときにまず浮かぶのは対象化された労働です。マルクスの『資本論』の最初に出てくる商品論は働く人たちの労働が商品に対象化されているという考えが出てきます。商品の使用価値がさまざまな自然質料からなる使用対象であるのに対して、商品の価値（価格）のほうは自然質料を微塵も含まないもので、端的にいえば、抽象的人間労働だというのです。

この価値の実体としての抽象的人間労働は、商品で表示されている対象化された労働の属性で、働く人たちの労働現場に見られる生きた労働の属性ではないのですが、多くの経済学者やほとんどの哲学者は対象化された労働という事の意味を理解できていないようです。それでマルクスの価値論は、スミスやリカードなどの古典経済学と同じ投下労働価値説（価値の大きさは投下された労働時間で決まるという考え）、あるいは支配労働価値説（価値の大きさはその商品が支配できる労働時間で決まるという考え）とみられることになり、ここから価値の実体が労働であることを否定する見解が支配的になっています。

でもエンデが時間貯蓄銀行の秘密を明かして、時間どろぼうは、盗んだ他人の死んだ時間を生きた時間と結びつけて死んだ時間を増やしていくと述べているように、価

値論の射程は、死んだ労働が生きた労働を支配することの解明へと開かれていなければならないでしょう。商品の価値がそれで表示されている対象化された労働ではないとしたら、資本の価値も対象化された労働ではなくなり、死んだ労働が生きた労働を吸収して自己を増殖するという資本の価値増殖の秘密は見えなくなってしまいます。

最近の流行は貨幣の流通根拠を集合表象(吉沢英成)や人々の信認(岩井克人)に求めるものですが、このような考え方からすれば貨幣の資本への転化はどのように説明するのでしょうか。資本も商品も集合表象や信認の産物となってしまわないでしょうか。そうだとしたら、人は何故集合表象や信認を形成できるのでしょうか。

3）社会的実体

マルクスが価値の実体が抽象的人間労働であるというとき、その実体は社会的実体です。しかもそれは幻のような対象性で、超感性的なものとされています。だからこの実体はもともと集合表象や信認というものとして現象していることになります。だから貨幣の流通根拠が集合表象や信認に基づくという認識は、社会的実体の現象形態に則した考えで、社会的実体についての解明ではないように思います。

言い換えれば、価値とは集合表象や信認に基づくものだから、なんの実体もない、というとき、これを主張する論者の実体観が、超感性的なものとしてある社会的実体というものの存在を認めることが出来ないことを示していると思われます。実際マルクスの社会的実体論を待つまでもなく、スピノザやヘーゲルの実体論も社会的実体のことで、それは超感性的なものでした。

つまりこういうことになります。マルクスにとっては、幻のような対象性としてある価値の実体は、超感性的な現象形態を伴っていて、その現象形態である価値形態そのものが、使用価値同士の関係という感性的なものを素材にして超感性的な形態をもつものだったのです。

働き手の具体的な労働が支出されて、商品で表示される労働という社会的なものに転化されたとき、具体的有用労働という眼に見える形は消失し、商品体という眼に見える有用物に取りついた眼に見えないもの、眼に見える商品体そのものの具体的質に付着した幻のような対象性、このようなものが価値の実体でした。

4）価値の現象形態

幻のような対象性としてある社会的実体は独自の現象形態を持ってはいるのですが、それは超感性的なものでした。そんなものを果たして認識できるのでしょうか。集合表象や信認といった判断を下すだけでそのままにしておいた方が、悩まなくて済むの



ではないでしょうか。実際に貨幣を集合表象の産物だと見なせば、分析はそれ以上進みません。吉沢さんのように、それを人間社会の原型という構造的なものと指摘するだけで終わってしまいます。

ここで考え直してみましょう。もともと二つものの関係は超感性的なものではなかったでしょうか。男と女の関係において形成される恋愛に端的ですが、人間の対象についての意識そのものも超感性的なものです。社会的なものとは人と人との関係のことですから、価値の実体に限らず、超感性的な現象形態を持つものはたくさんあるのですね。

自然科学ですら二つのものの関係において、超感性的な法則を定立します。ただ社会関係と違って、自然科学では数量への還元をしますので、社会的な質を問題にする社会関係の解明には自然科学の方法では歯が立ちません。そこでどうしたらいいか、というとき、幻のような対象性としてある価値の実体がどのように現象しているかを解明し、超感性的な現象の把握を成し遂げたマルクスの価値形態論の方法が顧みられるべきだと思うのです。

5）形態規定

わたしの見るところでは、マルクスの価値形態論の核心は形態規定の論理にあります。二つの商品の簡単な価値形態にあって、等価商品は単なる自然物という質を残したままで、この関係の中だけのことですが、交換可能性という社会的力を与えられています。この事実そのものが価値の現象なのですね。関係の中だけで自然物に新たな社会的力を与える、このように、関係の中で社会的な力が与えられることを、マルクスは形態規定と呼んでいます。この形態規定の論理を用いれば、これまで解明できなかった社会関係の解明が進むのではないか、これが 90 年代を通してのわたしの問題意識でした。「21 世紀のマルクス」というテーマでわたしが関心を持つのはこの点で、超感性的な現象形態を持つ人々のさまざまな社会関係を読み解くことが課題としてあると考えています。時間とお金の秘密をマルクスと考えることで到達した事柄を書いてみました。

## 後書

今回のメインはスピノザ研究会で報告したライプニッツ論です。以前に私はアイデンティティは他者から見られることで形作られるという、他者という鏡について言及

してきましたが、ライプニッツの宇宙を映す鏡としてのモナド論は、実は、デカルトの自我論に対置された関係論的自我論の提起だったことが判明したのです。

今回は、極の思想家ということで、モナド論の組み換えを試みてみましたが、自我についてのモナド論の応用は、もっといろいろと展開できそうです。

現場からでは、いよいよ離陸期に入った三団体のミッションについて考えてみました。あと、「マルクスと考える時間とお金の秘密」は雑誌『唯物論研究』に投稿したものです。また、ボツボツモモの本の書評が出始めました。いくつか紹介しておきます。

＊ ネットで見つけた書店員の紹介文

「モモ」を読んだのは小学生のとき。冒険物語としてのみ受け取って、よく言われる「メッセージ性」なんてこれっぽっちも感じてなかったように思います。考えてみると当然ですね。どうがんばっても使い切れないほど時間があった、「時間」をあるいないで計る必要性を全く感じずにただ遊んでいればよかった子供だったのですから。そんな子供が、「時間がない」が口癖の大人になってしまっていたことにある日気づく。そして、ふと思い出して読み返し、新たに出会う。「モモ」は、そんな児童書ではないでしょうか。

「モモ」には含蓄のある言葉がいっぱい詰まっていたと語る著者は、身近でも世界でも世の中がイライラしていることの深いわけを、「時間の問題」としてエンデから考えていきます。「時間ってなんだろう？」という、大人ならではの問いが投げかけられます。その問いを胸に、大人の視点から久しぶりに「モモ」を再読してみませんか？でも、いつのまにか「時間どろぼう」の側に立っていた自分を発見して、がっくりきてしまうかも・・・。(データ部　池田桃子)

＊ 『モモと考える時間とお金の秘密』購入方法

下記の郵便振替を利用してください。

郵便振り替え　　口座名　　社会システム研究所

口座番号　　０１０４０―７―３３９３９

代金 2600 円と通信欄に、『モモと考える時間とお金の秘密』購入とお書きください。



北東ーリーデ　(第3種郵便物認可)

(時事通信配信)
二〇〇五・四・二十二

境　毅著

## 『モモと考える時間とお金の秘密』

# エンデの言葉で「解釈」

ミヒャエル・エンデの「モモ」が出版された時、世のファンタジー好きはずいぶん興奮した。時間を盗む灰色の男たちというイメージは、読者をどきりとさせ、深く納得させるものがあったからだ。時間をお金に換える世の中、お金にお金を生ませる仕組みの中に取り込まれてしまった私たち、というように。身動きならないその状態から、モモという不思議な女の子が世界を解放してくれた。時間の秘密を知ることによって―。

本書は、実はモモには本当に時間を取り戻すことができなかったのだ、というところから論を進める。われわれは今も、お金がお金を生む仕組みの中にからみとられたままではないか、と。

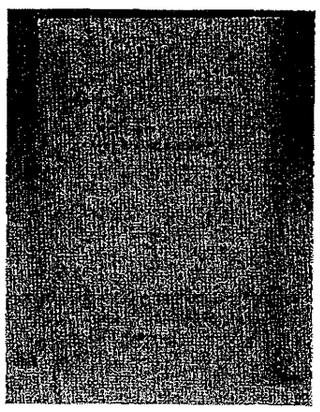
多分、エンデ自身もそう感じていたから、後々まで、人と経済のかかわりを深く考えつづけたのだ。

本書の著者は、その思考を誠実に跡付けながら、エンデが提案し、期待していた「意識の跳躍」が既になされたのではないかと示唆する。

地域通貨システムなどを紹介しながらの示唆には、生協活動や民間非営利団体（NPO）活動を長年続けている著者ならではの説得力がある。

「モモ」を論じた本は多い。その中で、本書に特筆される魅力になっているのは、エンデ自身の明確な易しい言葉を無理に難しく考える必要はない、むしろ、その明確さに気付くことから出発すべきだと、あざやかに示してくれている点だ。それも、マルクス、アインシュタイン、ソシュール、ハイデッガーなど、西欧のさまざまな英知を縦横に引きながらなので、読者も著者とともに知的な冒険をしているような気分になる。

改めて、エンデという人の大きさ、深さを思った。「解釈される」ことを嫌った人だったはずだ。あえてその「解釈」をしながら、エンデ自身の言い残したことの一端を言い得ているような本書を前に、彼岸のエンデはどんな顔をしているだろう。

（児童文学研究家・乾侑美子）

※書肆心水・二七三〇円